

私の人生とスポーツ

佐野 修弘	同志社スポーツユニオン会長
講師紹介〔さの・のぶひろ〕	

私の略歴

ただいまご紹介いただきました佐野でございます。同志社スピリット・ウィークにお招きいただきまして、心から感謝します。

まず、お話をします前に、お詫びを申し上げます。先般、我々の仲間で同志社の輝かしい歴史に傷をつける大きな事件がございました。私もスポーツ仲間の一人として、またスポーツユニオンの会長として心からお詫びを申し上げます。今後は同志社精神にのっとり、こういうことが絶対に再発しないように我々も努力をし、再出発をしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは今日は、「私の人生とスポーツ」ということにつきまして、私なりに考えていることについてお話をさせていただきます。今日は皆さんのお手元に資料をお渡ししておりますが、「私の略歴」「仕事と私」「私の人生の基礎」、そして「私の財産」「同志社スポーツの掲げる目標」「同志社への期待」「人生で大切なこと」、そして「結び」という順序でお話をさせていただきます。私はまだ、「佐野」といえばご理解がいただけるような人物ではありません。佐野というのはどういう男かと皆さんにも少しご理解いただきたいと思いますので、冒頭に私の略歴について簡単に申し上げます。

私は昭和十三年に京都で生まれ、今年で六十九歳になります。同志社大学の商学部で学び、昭和三十六年に卒業しました。卒業しまして、早いものでもうすでに四十六年が経過します。そして、同志社を卒業しましてから、仕事の関係もあって千葉大学の工学部の印刷工学科で一年間、印刷の勉強をしました。そして、帰りまして父の経営している会社へ入りました。

私は、小学校の五年生から柔道を始めました。「体を鍛えないかん、柔道でもやったらどうだ」と父に言われまして、小学校の五年生からずっと、桂から太秦の町道場まで自転車で、月・水・金と週三回通いました。そして大学に入学しまして、大学でも柔道部に入りました。今と違ってそのころは、大学の柔道部に一二〇名ぐらいの部員がいました。その中で合宿に行こうと思ったら、二十五名に入らなければなりません。また、選手になろうと思ったら、七名に選ばれないといけないということで、大学時代は、必死になって柔道をやりました。私たちのときは、階級別がなくて、大きい者も小さい者も一緒に戦いました。私は一番小柄で、現役時代は五十三、四キロの体重でありました。そういう体の小さい者が大きな者と戦うとなると、人の二倍も三倍も練習しないといけないということで、本当に必死になって練習をいたしました。私の顔を見ていただくと、おでこのこぶや、耳のこうしてつぶれたことは、すべて柔道で得た勲章です。そんなことで、一二〇人の中で二十五人がまず合宿に連れて行ってもらう。そしてまた、四回生のときには、関西の大会で七名の選手の一人に選んでいただいて、その責任を果たさなければいけないと思って試合でも必死になって戦いました。

学校を卒業してからは、京都に住んでいますので、監督もやってくれということで、昭和五十年から五年間監督を務めておりました。そして柔道部のお世話をいろいろしておりました。それから、同志社のスポーツのために少しでもお役に立てたらと思って、スポーツユニオンの役員にもしていただきました。ちょうど私がスポーツユニオンでお手伝いをしていたときは、相撲部の総監督の北村さんが会長として同志社のスポーツを導いておられました。私は北村会長のもとで二十二年間、理事長としていろいろと鍛えていただきました。そして、それが終わりまして、平成十四年からスポーツユニオンの会長を務めております。ちょうど六年目に入りましたが、良き仲間、友に恵まれて、何とかその責任を全うしております。

それから、柔道の出身ですから、京都の柔道界のお手伝いもしております。京都府の学生柔道連盟の会長を十四年務めておりました。そして強い要請を受けまして、京都府柔道連盟の会長を承って、この四月一日からスタートしたところでございます。ちょうど十二年前に七段を頂戴しまして、柔道界のために少しでもお役に立てたらと思ってやっております。

仕事と私

次に、「仕事と私」ということでお話をします。やはり、このようなお話をしようと思ったら、その基本は仕事をしっかりやらなければいけないということです。仕事も中途半端で会社が傾いているのに、人のお手伝いや組織のお世話はできません。そんなことで必死になって仕事を頑張っております。私どもの会社は、私の父が創業いたしまして、七十四年になります。株式会社にして五十四年になります。現在、一三〇名ぐらいの社員が頑張ってくれておりまして、三つの会社がありますが、年間でだいたい八十億円ぐらいの売り上げです。

日本の国に憲法があるように、会社もいつの時代でも不変の精神、魂というものをもっております。これを会社の憲法として、社憲と呼んでおります。社憲としては、「創意工夫と技術錬磨で未来を開こう」を掲げています。絶えず何事に対しても創意工夫を凝らしていこう、そして技術を磨き、将来に向かって発展していかなければいけないということで、「創意工夫」「技術錬磨」「未来創造」を会社の憲法として、今もその魂を失わずにやっております。

それから経営の理念としては二つあります。「会社の発展と社員の幸せが一致する経営を行う」ということです。会社がいくら栄えても、社員が非常に惨めな生活をしている、これではいけません。社員がいくら豊かであっても、会社が傾いてはいけませんので、会社の発展と社員の幸せが一致する経営を行うということを実践しております。

もう一つは、この京都には、伝統産業というのがあります。漆も織物も染め物も陶器も、いろいろな素晴らしい伝統文化があります。そういう伝統の技術、文化を生かして未来につないでいこうとやっております。「伝統の技術を磨いて、将来に向かって発展していく」ことが、二つ目の経営理念です。最初は、京都の伝統産業の一つ、着物の衣裳を作り染める型紙の彫刻を行い、着物のいろんな柄を染めていく、そういう衣装と型紙の彫刻の仕事が発祥でした。その仕事をこれからも発展していく分野につないでいこうと、日本のファッションも着物から洋服の方へ移行してきましたので、洋服のプリントができる型を作ろうとなりました。シルクスクリーンとか写真型だとか一般的に言いますが、洋服をプリントする型を京都工芸繊維大学の先生のご指導のもとにヨーロッパから技術を導入しました。洋服をプリントする、形を作る事業に進みました。

それから、次はそういう技術をベースにして、これから発展していく分野は何かということです。私が同志社を卒業して、千葉大で学んで印刷の技術を身につけましたが、これから成長する分野は住宅だということになりまして、昭和三十七年から、型を作る技術、プリントする技術で色柄が自由になるという壁面の材料、建材を作りました。その当時、日本も造船ブームでありました。住宅よりもまず造船だということで、青函連絡船とか宇高連絡船とか、船が六隻ずつ連続で建造されましたが、これは非常に面白ということで、天井も壁も百パーセント、私どもの材料を使っていたきました。それで船に一つのかかわりができて、次は客船・フェリーブームの時代になりました。瀬戸内海を関西汽船の船が走り出しました。そして、阪急フェリーや、東日本フェリーなど、フェリーが次々できました。そういうフェリーにも私どもの材料を壁や天井に、日本で建造される船の八〇パーセントに採用されました。色、柄が自由にできるということで大変喜んでいただいて、造船で一つの柱を作らせていただきました。それから、造船も、韓国や今では中国、そしてインド、ベトナムなどへとだんだんと移行しております。

造船は、日本もこれからなかなか難しい時代がくるとということで、三十五年ぐらい前から、船から住宅関連の事業に進みました。大手と一緒にのこともしていても勝負できないということで、水まわり・火まわりということに限りまして、非常に性能の要求される建材を扱っています。お風呂場とか台所とか洗面所の建材を中心にしています。昔は全部左官さんがタイルを貼っていたところですが、タイルを貼らなくても、大工さんが接着剤でつけられる建材を作って、しかも色柄が自由になるということで、大変喜んでいただいて、今では大手のハウスメーカーさんなどで大量に使っていただいております。

それから次には、これから情報通信の時代になるということで、プリントする技術、型を作る技術をマイクロ単位にしまして、フィルムの上に全部回路を導電性のインクでプリントをしていくという仕事をやっています。パソコンやワープロ、ファクシミリ、複写機などの回路をプリントしてそういう業界へ出すようにしました。それも今は発展途上国の方へ全部流れてしまっております。台湾や韓国や中国などで、そういうものが非常に安く大量に日本の技術を導入してつくられている。そんなことで、これも商売にならないということで、それからさらに精度を高めて手描き入力タッチパネル、現金の自動出し入れ機、鉄道会社の自動券売機、ガラスの上の透明のタッチパネルをいろいろとやっておりました。これも海外へ、発展途上国へ流れました。そんなことで今は、面状発熱体をフィルムにプリントして床暖房を行う製品を作って「キョウヒーター」という名前です。市場に出しています。特にまた新しい分野としては、自動車のシートヒーター、不織布の上に発熱体を刷って、シートの中に入れます。今まで自動車のシートのヒーターがなかったかと言われると、ありましたが、これは線状のヒーターで線の中に熱を発生するのでむらがあったり、線が切れたり、ショートしたりする可能性があります。私どもの製品は不織布に発熱体をプリントして自動車のシートにすることで、むらなく即暖まるもので、トヨタの北米・北欧に輸出されるシートの中へそういうものを入れております。

そうして時代の変化と共に、次々に成長する分野へつないでいて、今日まで頑張っています。日本も品質や価格やデリバリー、いろいろと非常に厳しくなってきました。そんなことで世界に通じる管理をしていかなければならない、とISOという国際的な商品規格や環境規格を八年前にクリアいたしました。品質のISO 9001、そして環境のISO 14001を取得し認証工場にさせていただいております。以上が、私が取り組んでいる仕事です。

私の人生の基礎

三番目の「私の人生の基礎」についてお話しします。私の人生を振り返って、何によって私の人生を築いているのかと考えますと、一つは同志社で学んだ同志社の教育、これは私の人生を大きく支えてくれております。そして、二つ目は同志社のスポーツを通じていろいろと学んだことです。この二つが私の人生を支えてくれています。

同志社で教えられたことについて三つほど申しあげますと、まず「愛と寛容の精神」です。この会場へ入りましたら、同志社の歴史の写真が掲示されていました。その中に、上野直蔵先生のお写真がありました。私たちが学んだときは、上野先生が総長でいらっしゃいました。そして卒業するときに上野先生が「やはり人間というのは愛と寛容の精神がないといけない」ということを言われました。この言葉が今も頭の中に強く残っております。人を愛する、そして生き物愛する、そしてまた人生は許しがたいこともあるでしょうが、寛容の精神が必要だということを教えられました。人や生き物、こうしたものを本当に愛情をもって接していく、これも大切なことです。また、自分の意に沿わないことも多いですが、できるだけ寛容の精神をもって、人とはあまり争いごとをしないということです。

二つ目は、「正義と真理の追求」です。これは同志社の歴史で総長や理事長、学長を長くお務めになられた松山義則先生から教えられたことの一つです。正義や真理のために、立ち向かうときには勇気をもって立ち向かう、命をかけて立ち向かうという姿勢を忘れてはいけません。ややもすると、正義のためでも、やっぱり争いの中に巻き込まれるのは困る、火の粉をかぶるのも困るということで、一般的には避けられる方が多いでしょうが、やはり「正義と真理」を求めて妥協してはいけな、戦うときは命をかけて戦う、こういう姿勢が大切で

す。三つ目は、尽くせる喜びを感じるということです。いろいろと人のため、世のために尽くせることは非常に大切なことです。ややもすると、求めることばかり、尽くすことよりも自分に何をしてくれるのかというような、求めるケースが多い世の中になっています。最近の身近な事例としては、コムスンです。お年を召されて、もう人生の最終段階で介護を要する人がいます。そういう人のために一生懸命尽くす、貢献するという大切な気持ちを忘れて、架空の請求をしたり、また十分な介護をしなかったりします。尽くすことよりも食いものにしようというような会社や、そういう姿勢は本当に残念です。やはり、人に対してなんとか役に立つ、尽くす、ということに喜びを感じる人生であってほしい。世のため、人のため、また社会のため、また我々としてはこうして同志社のために尽くせる。また、私はいろいろと事業をやっておりますが、会社のため社員のために尽くせる、そのことを忘れてはいけな

いと思っています。これが同志社教育から学んだことです。それからスポーツを通じて学んだことを話します。それは、「不撓不屈の精神」を養う、「心身の鍛錬」「友情」を深めることです。私が監督を務めていたとき、練習の前に「力の限界に挑戦して不撓不屈の精神を養う」という言葉を部員一同が斉唱して、そして練習をはじめました。卒業した学生は、「不撓不屈の精神」でやっております、と言ってくれます。そういうことを聞くと本当にうれしいものです。何事にも立ち向かってチャレンジをしていくのが、「不撓不屈の精神」です。柔道は一対一の勝負で、人を頼ることはできません。自分ですべて判断して勝負していかねばいけません。私は一番小柄でありました。しかし、気合や根性では絶対に人に負けないという自負がありました。いつも試合のときには、自分のもてるそういう魂をすべて打ち出して戦いました。やはり、「不撓不屈の精神」というものを身につけて、そして試合でも戦うことができました。

次に「心身の鍛錬」です。今の世の中を見ていると、本当に効率とか成果ばかりが求められております。普通の神経では生きていけないような時代になってきています。私も仕事を通じていろいろな方とお会いしますけれども、本当にシビアな世の中です。追い込まれて自信をなくし、悩んでおられるという方が多くなってきました。私はスポーツを通じて、シビアな効率や成果を追及していかねばならないなかでも、精神的には絶対負けないという「心身の鍛錬」を学びました。これからは、素晴らしい能力も必要であります。心や

体、これを鍛えておかねばいけない時代になってきています。次は「友情」について話します。世の中は、自分さえよかったらいいというような時代になってきている。利害のないスポーツは本当に純粋な世界です。スポーツの仲間とお会いすると、ほんと人間性を取り戻し、そして自然に何でも素のままです。スポーツを通じて友情を深め、そして自分を作ってくれたものだと思っています。卒業して四十六年経ちますが、スポーツの仲間で、毎年各部のマネージャーが集まって、そしてまた友情を深め合っております。今年も二泊三日でまたみんな集まろうかということになって、楽しみにしております。スポーツを通じてお互いの純粋な友情を深める、こういうことは非常に貴重なことです。私の人生の基礎は、同志社の教育とスポーツによって築かれていったのです。

私の財産

次に「私の財産」ということですが、私は何も財産がありません。しかし、金銭に代えがたい素晴らしい財産をもっております。人と人との出会いというものを大切に、そして素晴らしい人脈を作っていくということ、これは非常に大切なことです。お茶の世界で「一期一会」というのがあります。その瞬間は一度しかないということでそれを大切に、そしてまた、お互いに幸せになっていくということです。「一期一会」にあるように、出会いを大切に、そして豊かな人脈を作っていく。このごろ私も、よろず相談所のような経験をすることがあります。いろんなことを相談してきます。相談を申しあげると、相談をしていただける、うれしいことだと思って、自分の力の限り、できる範囲でやっております。おかげさまでいろんな世界との豊かな人脈を、私の財産として築いております。

二つ目の「私の財産」は、「人の喜びを自分の喜びとする」です。人が喜んでいて、これほどの自分の喜びはありません。人が苦しんでいるのを見て喜びことはできません。私は会社でも、工場へ行ったら必ず一人ひとりの名前を呼んで声をかけています。そして、プライベートなことも踏まえて、いろいろと声をかけていきます。社員が本当にそういうことを喜んでくれて、また「社長も声をかけてくれたな、私のことも理解してくれたな」と感じます。こういうことがやはり社員の喜びである。人とのいろんな関係、これをすべて喜びに変えてゆく。そして、喜んでいただいたら、自分の喜びとしていく。こういう姿勢を私は貫いていきたいです。それが私の財産であると思います。人を泣かせたり、苦しめたり、落とし入れたり、そういう人もいます。こういう人には、そのツケは必ず自分に回ってきています。人間で徳を積むということは、本当に大切なことです。皆さんも一人でも多くの人に喜んでいただける、こういう財産をもっていたいただきたいと思います。

三つ目の「私の財産」は、「チャレンジ精神」です。世の中は、本当に目まぐるしく変化していております。そういう変化に絶えずチャレンジしていく、可能性を求めてチャレンジしていく姿勢は、本当に欠かすことができないのです。そういうことでは、「水」から五つのことが教えられる「水のためなり」という五つの言葉があります。第一に自ら活動して他を動かめるといのが水である。自らとして行動していく。そして他を巻き込んで活動していく。第二に常に己の進路を求めて、止（や）まざるは水なりです。空いているところがあればそこへぐっと入り込んでいく。これは水の特性です。そして、自分の目標に向かって流れていく。絶えず自分の進路を求めて進んでいくのが水です。第三に障害にあつて、その勢力を百倍にするのは水です。目標に向かって流れていこうとすると、いろんな障害にあう。そういう障害にあうと水は力を百倍にします。第四に自ら潔くして、汚濁を洗っていく。汚れているものを水はきれいに洗い落としてくれる。そして、清濁合わせて吞んでいく。第五に水というのは洋々として大海を満たしている。そして、蒸発しては雨となる。また、雲と変化をしていく。そして、凍っては美しい氷や雪となる。しかし、その水の性は失わない、水としての値打ちは失わないのです。こういうことが水から教えられることで、チャレンジ精神の参考にしていただきたいです。

私はチャレンジ精神が非常に旺盛であつて、何事にもチャレンジしていきます。小学校入学のときに父の事業の関係で、終戦の昭和二十年の四月に日本を離れて、六人兄弟でしたが家族全員で満州に行きました。四月に行つて八月、日本は敗れました。二〇〇〇人位から襲撃にあつて、ひどい目に遭いました。ピストルの合図一つで攻め込まれて、家にあるものすべて剥ぎ取られました。そして、逃げ場を求めて次の村へ行く。また朝早くから、攻め込んでくる。谷を越え山を越え、もう体は下半身ドロドロで、ズクズクで靴もない。またそこへ攻め込んでくる。物心ついたときに命からがらで、私は貴重な経験をしました。そしてまた一年間、零下何十度のところで生きていくために必死に戦いました。それからまた、引き揚げてくる過程でも、体験できないような体験、零下何十度のところへ貨車に四本の木を入れて、そこへロープを張つて、そしてその貨車でずつと移動するというようなこともありました。船の中では、栄養失調で人が次々と亡くなり、次々と海へ捨てていかれました。貴重な経験をして、命も惜しくない、また貧乏も怖くない。そんなことがチャレンジ精神にもつながっているのではないかと思います。

同志社スポーツの掲げる目標

次に、「同志社スポーツの掲げる目標」についてお話しします。同志社スポーツユニオンというのがあります。運動部ご出身の方（現在、五十一クラブありますが）は、卒業されますとスポーツユニオンの会員になっていただきます。そして現在、三万二〇〇〇人ぐらゐの卒業生のOB・OGの皆さんでこのスポーツユニオンを構成しております。スポーツユニオンでは、現役の皆さんまた卒業生の皆さんが、スポーツの世界で輝かしい成績をお修めになったらみんなで称えるということで、毎年一月の最終土曜日、七〇〇人ぐらゐお集まりいただいて祝勝会をやっております。それから、四年に一回ですけれども統一名簿を発刊しております。今度は第七刊を出させていただきます。これで二十八年間、統一名簿が出されております。個人情報管理などありますが、名簿についてはやはり、仲間がお互いの情報を交換し合つて、そしてお互いの幸せのためにやっていこうということで、今年もやることになりました。それから、スポーツユニオンの懇親・交流ということで、ゴルフの会をやっております。あとは、学校とまた同志社スポーツとの関係、こういうものをうまく調和・調整させていく、ということで、大学の執行部の先生方とのいろいろとコミュニケーションの場も作っております。そういう事業をやっておりますので、また今日ご出席のスポーツ関係者の方は、ぜひ、力を貸していただきたいと思ひます。

スポーツユニオンとしては三つのことを掲げております。その一つは「強い同志社スポーツ」を作っていくことで、やはり勝負の世界では勝たなければいけません。いろいろと、参加することに意義がある、また、一生懸命やることに意義がある、などと言われます。もちろんそれも意義があります。しかし、最終的には勝負の世界、勝ち負けのはっきりする世界では勝たなければいけません。勝とうと思つたら、そう簡単に人並みのことをしては勝てません。人の二倍も三倍も努力や苦勞を積み重ねないと人には勝てません。戦いには勝てません。これは商売でも、スポーツの世界でも、何でも一緒です。人並みのことをしていたら絶対に商売も繁栄しません。スポーツの世界でも、人並みのことをしていても絶対に勝てません。やる以上は努力をして苦勞して、やはり勝つ。これは非常に大切なことです。そういう苦勞する、努力をすることによって壁が破れたときに、初めて自信とか、誇りとか、喜

び、こういうものが出てくるのです。努力もせずに、苦勞もせずに自信や誇りや喜びは出てきません。必死になって、若い青春をかけて情熱を燃やして、苦勞する努力する、それに大きな価値がある。そして、やった以上はやはり勝つということです。こういうことによって自信や誇り、喜びが湧いてくるのです。

二つ目は「人をつくる同志社スポーツ」ということで、スポーツを通じて人間形成をしていく、人を作っていく、こういうスポーツには大きな使命があると思います。スポーツを通じて、やはり人格形成をしていく。規律や秩序、礼儀作法、こういうものが、本当に今の世の中では、薄れてしまっています。人間社会が何によって保たれているかという、やはり規律や秩序、礼儀作法、ルールを守る、こういうことによって成り立っているのだと思います。そういうことから、スポーツを通じて立派な人間形成、人格形成、こういうものをぜひやっていただきたいと思います。そして、気持ちよい社会生活、人間社会が築けるように、規律や秩序や礼儀作法もスポーツを通じて自然に身につけていただきたいと思います。

三つ目は「友情を深める同志社スポーツ」です。友情というものはお金で買うことができません。一緒に汗をかき、血を流し、学び、そういうことによって友情というのは深まっていくのだと思います。そして、築かれた友情は永遠に続きます。築かれた友情は、不滅です。消えることがありません。そういうことから、お金で買うことができない、一緒に学び、一緒に汗を流し、血を流し、築き上げた友情は不滅であり、永遠のものであると思いますので、スポーツを通じてこういうものを築いていただきたいというのが「同志社スポーツが掲げる願いと目標」であります。

同志社への期待

次に「同志社への期待」ということで、同志社は今も素晴らしい発展を遂げております。八田学長のもと、同志社は時代の変化に対応して、次々と新しい構想を実現していっております。何も注文をつけることはございませんが、新聞等を見ておますと、少子化でどんどん定員割れをしている大学が次々と出てきております。三分の一の大学が、定員割れしているなかで、同志社は三年連続で受験者数が増えているということです。五年連続で三万人をオーバーしていると報じられていて、うれしい限りであります。同志社を卒業された方々とお会いする場、また他大学を卒業された方々とお会いする場、私もいろいろなところへお招きいただいて伺いますが、卒業生の皆さんとお会いすると非常に品があり、教養が感じられる。これはやはり新島先生の魂だなということを教えられます。同志社には文化の薫りがする、格調を感じる、そういうことがあります。同志社らしいと言われるように格調と文化、これをさらに大切に伸ばしていただきたい。

二つ目は「逞しいチャレンジ精神」です。世の中は次々と国際化・グローバル化・IT化されていきます。少子高齢化もどんどん進んでいきます。厳しい競争社会に入ってまいります。まさに大学においても企業においても、また個人においても本当に格差のついていく時代です。勝って上っていくところと、淘汰されていくところと、はっきりと格差がつく時代になってきていますので、こういう時代の変化にチャレンジしていく、逞しい同志社であってほしいと思います。

三つ目は「私心を捨てて貢献できることに喜びを感じる」です。企業の経済社会においても、大学においてもいろんな考えをもたれている。いろんなイデオロギーもあることです。大企業を見ますと、すべてとは言いませんが、いろんな派閥があって、あるときは非常によかつたけれども、上が変わったら非常に惨めな思いをする。そして、お互いに足を引っ張り合って、本来の仕事に使う神経よりも、そういうところに使う神経が非常に多いというようなことがあります。これはやはり、私心、己のことを思っているからこういうことになるのだと思います。私心は捨てて、そしてやはり学生のために、また大学のために、社会のために、そしてイデオロギーや派閥やそんなことを捨てて、学校を充実し発展させていくという、こういう姿であっていただきたい。今の同志社は、決められたことにに対して本当にみんなが心をつにして、そして歩んでいっておられる。来年の春にはまた、生命医科学部、スポーツ健康科学部という新しい学部も誕生することも、素晴らしい構想を実現していかれたことの一つだと思います。こういうことをみんなで支えて、そしてこれが立派な同志社大学の柱になるようにやっていかなくてはいいけないと思います。

人生で大切なこと、大切にしたいこと

七番目は「人生で大切なこと、大切にしたいこと」について、お話をします。やはり、人生で大切にしたいことは信頼関係です。お互いに信頼し合って、心を許し合って、そして生きていける、生活していける、こういう関係が大切です。そしてお互いに駆け引きをしたりすることなく、真心で接していける、こういうことが大切なことだと思います。信頼関係があり、そして真心で接していける社会が大切ですが、こういうことが今の世の中に薄れていると思います。そのためには何事に対しても誠心、誠意、誠実にやっていく。こういう気持ち、姿勢を大切に、そして、やはり最終的には尊敬される人になっていかないといいけないと思います。

二つ目に人生で大切にしなければならないことは「努力」です。簡単な言葉であります。本当に人間というのは努力の連続だと思います。いろいろとつらいことや苦しいこともあるでしょうが、そういうことを乗り越えて、努力を積み重ねていくのです。私たちの仲間でも、一獲千金を狙って、大きく株に投資をして、まだ自分の甲斐性でやっているうちはいいのですが、先物取引なんかでそこへのめり込んでしまう。損をしたらまた取りかえそうと思ってまた先物をやる。どんどんエスカレートして自分の人生を破滅に追い込む。退職金から何もかも全部を放り込んだというようなことで、人生の最終仕上げをしないといけないうちに、惨めな寂しい思いをしている人、こういう人に出会うケースが多くあります。それからまた、土地が上がってきたといったら、不動産や金をどんどん借りてそこへ投資する。中にはしっかりと稼いでいる人もあるかもしれませんが、それにのめり込んだ人は、必ずひどい目にあっていきます。そして自分の人生を、本当に惨めな、寂しい思いで終えていかないといいけない、こういう人に出会いますと、一番大切なことはやはり努力だなと、一生懸命毎日毎日努力していく、こういう気持ちを忘れてはいけないと思います。

それから三つ目は、「健康」です。私も健康を少し損ねたりしていることもありますが、健康を損なったらまず考え方が非常に消極的に、後ろ向きになり、迫力がなくなってきました。そしてもてる能力も発揮できない。社会へ出られても、すばらしい能力をもっておられても、健康が伴わないということで、なかなか力が発揮できない人も多く見受けます。人間は、やはり健康でないといいけない。そして自分の健康、家族の健康、それから仲間の健康、みんな健康であることによって、またそれが非常にいい影響をお互いに及ぼしてきます。私は健康診断、人間ドックを年に二回受けています。それから三人のお医者さんに毎月一回チェックしてもらっています。私は来年で七十歳ですが、染めているのか、かつらをかぶっているのか、人に会ったらよく言われます。全部自分の毛で、白髪も出てこないのです。それから歯も、入れ歯は一本もないのです。やはり健康というものは、きっちとチェックをし、事前に手を入れていくことは大切なことです。それから私は、大酒を飲み続けてきました。浴びるほど酒は飲ませていただきました。そうするとやはり、いろいろとアルコールの害が出てきました。血糖値が上が、血圧が上が、少し脳梗塞が出かけてきて、「このままいけば腎臓透析しないといけませんよ」と言われました。あと十年ぐらいは生きたいと思っていますので、お酒も三週間前から止めました。それからウォーキングをやっています。三日に一回は必ず六キロ歩きます。昨日も六キロ歩いてきました。この日は歩くということで、手帳に丸をしておくのです。雨が降ったら変更しないといけませんが、初めから一カ月ごとに歩く日を手帳に丸をしておくのです。一年と二カ月続けてきました。これをやり続けていくと体につのリズムができてくる。歩かないと体が求めてくるというようなことになって、三日に一回は六キロ、一時間二十分歩いています。そうするとやはり、足腰が強くなってきて、体が楽になってきます。そういうことから、健康管理をしています。若いから大丈夫だということはありませんので十分に体を鍛え、そしてきっちとチェックをしておく。自分が健康を損ねたら周りの人に迷惑をかけます。そういうことでいつまでも身も心も健康であっていただきたいと思います。

結び

いろいろとお話ししましたが、結びとして「もっと楽しくもっと豊かに」についてお話しします。私が絶えず言っていることは「もっと楽しくもっと豊かに」です。会社でもずっと言い続けております。今、皆さんは楽しいですか。こんなもので楽しいと思ったらあきませんよ。みんなの力でもっと楽しくしましょ。そして、もっと豊かになりましょ。豊かにいって、何か給料が上がったらいなかと思いますが、もちろんこれも豊かの一つです。経済的に豊かになるのは、豊かの一つです。中国などを見ますと、富裕層と一般の人の生活の格差がすごいんです。日本は比較的、そういう格差がなくなってきた、経済的に豊かになってきました。私どもの会社をずっと見ていても、初任給など絶えず意識しています。大企業と初任給がどうかと思ってもう格差がなくなってきた。経済的には、大企業も中小企業も格差は非常に縮まりました。家庭においても、富裕層とそうでない層とも格差がなくなってきた。生活していけるようになりましたが、これで満足してはいけません。私は会社でも、もっと豊かにいってほしい。それがそうであってもそれよりよくしようということで、そのためにはみんな頑張って、そして豊かになるようにしようとしています。物質文明は本当に豊かになりました。そして失われているのは精神文明ですが、やはり精神的にさらに豊かになっていかなければならない。そして私たちは小さいとき、あまり昔のことを言う年とっていいと言われますが、狭いながらも楽しい我が家ということを行いました。家は狭くても一家団欒して、本当に楽しい、私たちの小さいときはそういう時代でした。今はみんな個人の部屋を持ち、部屋に入り、そして親子の対話とか兄弟の対話、こういうものが非常に少なくなっています。また、想像もできないような、本当に人間としてどうなってしまったのかと思うような事件もありました。そんなことから考えると、本当に心をつ失ってしまっている。精神文化を失ったということではないか。です。でないか。と思います。人の哀れがわかる、苦しみがわかる、こういうことを本当にもっと大切にしなければならい。一つのものでも足りなかったら分け合って、そしてお互いに少しでも豊かに過ごしていける。絶えずこういう姿勢でもっと楽しく生きていこう、家庭生活を送ろう、また学校生活を送ろう。楽しくやる、そしてそういうことを通じてお互いの心も豊かになっていく、こういうことが大切であろうと思います。

それから、「生き生きわくわく」も大切なことです。私は同志社小学校の鈴木校長にお会いしてお話をしたときに、「まさにそうだなあ」ということを感じました。「佐野さん、小学校、去年から開校したけれども、生徒がみんな走って学校へ通学してくる。うれしいことですよ。」「学校行くのいややなあ。また行ったらいじめられるのちゃうかあ」と違って、本当に生き生きわくわくして生徒が学校へ来てくれる。鈴木校長はまた、校門へ一番早く行って、「おはよう、おはよう」と声をかけてあげるということを話しておられました。先生は「朝入ってくる生徒の姿を見たら、この子は昨日何か問題があったのと違うかなとか、今悩んでいるのじゃないかな」ということが大体想像できると話しておられました。そういうこと一つにしても、本当にこれは「生き生きわくわく」です。できないか。と思います。人の哀れがわかる、会社へ来る。私も会社には一番早くに出ます。そして出たら、門のところに立つて一人ひとりに声をかけます。「おはようございます」「おはよう」「ご苦労さん」と声をかけます。だいたいそのときのレスポンスで、「ちょっとこの社員は何か家庭で悩みを持っているな」とか「ちょっと健康を書しているのではないかな」とか大体わかります。そういうところで、わかればすぐにその人のところに行って話しかけると、奥さんが調子悪いとか、子供がちょっと調子悪いのだとか、自分は夜寝られないとか、さまざまな悩みを言ってくれます。そういうことから、悩みをできるだけとって、「生き生きわくわく」していくのです。生き生きわくわくする、さわやかな人生を送りたいものだと思います。

それから、「幸せ集団」を作っていくのです。自分たちは同志社出身でよかったなと、自分たちは同志社で学んでよかったな、自分たちはこの家庭に生まれてよかったな、自分が幸せになっていくように、そしてまた仲間が幸せになっていくように、こういう幸せ集団がたくさん広がっていったら、日本も平和で、そしてみんなが気持ちよい社会生活ができと思っています。そんなことから、私が申しあげたいのは、同志社人全体が、同志社のカレッジソングを腹の底から声を高らかに肩を組みあって歌える、こういう同志社人でありたいと思っています。よくスポーツの会など招かれますと最後はみんな肩を組んでカレッジソングを歌います。あのときの自分というのは本当に同志社で学んでよかったな、スポーツをやっているよかったな、本当にそういうなかから誇りを感じます。同志社で学び、関係した者がみんなそういう喜びを実感できて、そして幸せな人生を歩む集団が作っていける、こういう姿でありたいと思っています。私もまだこれからの人生、少しでも同志社のために、またスポーツのために、力の限りお役に立ちたいと思っています。また本日お集まりの皆さんもさらに同志社の輝かしい歴史、さらに誇れる同志社、こういうものを目指してお互いに力を合わせて頑張っていきましょう。ご清聴本当にありがとうございました。

二〇〇七年六月十四日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録